



合併の経緯 —八里村—

昭和31年に小瀬村と合併して緒川村となった八里村は、旧村役場文書4425点が残し、小学校の古写真も昭和初期から残されるなど、市内の旧町村の中でも史料に恵まれた地域です。その合併の経緯をたどってみましょう。

◆八里村の成立まで

明治22年の市制・町村制によって八里村が誕生しました。その村名は、江戸時代以来の8つの村（大岩村・小舟村・油河内村・松之草村・小瀬沢村・吉丸村・入本郷村・千田村）が合併したことにちなんでいます。8か村は、江戸時代以来那珂郡に属し、明治4年に設置された大区小区制下では、はじめ小瀬沢・松之草・小舟・油河内・大岩の村々は、鷺子・高部など12か村で第4大区5小区に、吉丸・入本郷・千田は国長・下小瀬などととも第4大区6小区になりました。その後、明治11年の地方三新法公布により大区小区制が廃され、八里村の前身となる8か村連合が誕生し、同22年に八里村が発足しました。

◆八里村発足

八里村の初代村長には大岩の竹内猛が着任、役場は竹内宅に置かれたと考えられます。明治25年5月に次の村長が着任すると、以後役場は油河内に移りました。油河内は、八里村郵便局・駐在所・八里尋常高等小学校などがあり、村の中心的な場所でした。

油河内の桑名家は、かつて敷地内に村役場があったためか、今も「古役場」という屋号で呼ばれています。その後、役場は桑名家の向かいに移転し、木造二階建て、東向きに建てられ、森林組合などの組織も含まれたそうです。当初、役場には井戸がなかったため、毎日周辺の家に水をもらいに行くのが職員の仕事のひとつでした。また、宿直の風呂も住民が提供していたそうです。

八里村の人口は明治38年に3,894人、大正5年に4,424人と増加傾向でしたが、日中戦争開戦以後減少していきます。これは村民が兵役や徴用で応召されたことも要因のひとつでしょう。戦後は増加



▲かつての八里村役場（八里支所）跡
左側の大きな建物のある場所が旧役場跡地

し、昭和25年には4,394人（現住人口）、戸数720戸を数えました（国勢調査）。役場職員数は明治38年に3人、大正3年に4人、昭和6年以後はほぼ5人で推移しています（3役を含まない）。一方で役場の扱う文書の数（収受及び発送）は、明治38年に1798通でしたが毎年増加し、昭和9年には4753通と、職員一人当たりの負担はおよそ1.5倍になっていました。戦後の昭和25年には職員16人及び使丁1人になり、大幅な増員となりました。

◆八里村から緒川村へ

昭和28年9月、町村合併促進法が公布されると、茨城県は各市町村に合併案を提示、八里村は南に接する長倉村との2か村合併案を提示されました。長倉・小瀬・八里3か村での合併の協議が進められましたが、役場の位置が問題となり合意に至りませんでした。特に長倉、中居地区と至近性の高い吉丸・入本郷・千田は引き続き長倉村との分村合併を模索しましたが実現せず、合併促進法の失効する直前、小瀬村との2か村合併で合意し、昭和31年9月29日に緒川村が発足しました。その後、八里村役場は昭和42年まで八里支所として存続し、戸籍や税、配給などの事務を取り扱いました。支所廃止後、建物は取り壊され、昭和48年に跡地にスクールバスの車庫が建てられました。

佐藤隆男さん、野崎由美子さんに聞き取り調査にご協力いただきました。

【参考文献】

塙泉嶺『那珂郡郷土史』宗教新聞社 大正12年、茨城県総務部地方課編『茨城県市町村合併史』昭和33年、『緒川村史』昭和57年、『緒川村閉村記念 緒川村のあゆみ』平成16年

■問い合わせ■

常陸大宮市文書館 ☎ 52-0571



▲八里村役場（『緒川村のあゆみ』より）